



1916(大正5)年

9/2	上野駅を11時20分発の列車に乗り、13時13分に熊谷駅に到着した。熊谷寺を訪れ、熊谷直実を偲び「熊谷の蓮生坊」の歌を詠む。宵闇のころ西空に沈もうとする蠍座を見て、「武蔵の国 熊谷宿に 蠍座の 淡々ひかりぬ九月の二日」の歌を詠む。(歌碑・八木橋百貨店前) 旅館「松阪屋」に宿泊。
9/3	熊谷から秩父鉄道で、寄居へ向かう。「立ヶ瀬断層」「象ヶ鼻」などを観察した。「毛虫焼く…」の歌を詠む。次いで荒川に沿って、末野の石切り場、長瀬のポットホール、「虎岩」などを観察。「粋なもやうの博多帯」の歌を詠む。夕方、「山峡の 町の土蔵のうすうすと 夕もやに暮れ われらもだせり」の歌を詠む。国神の旅館「梅乃屋」に宿泊。 ※もだせり…黙ってしまう
9/4	早朝、霧の中を馬車3台に分乗して小鹿野に向かう。いったん小鹿野の旅館「本陣寿旅館」(推定)に荷物を置いて、泉田にある地層の露頭「ようばけ」を観察。夕暮れ頃、旅館への帰途で「秩父の峡のかへり道」の歌を詠む。同旅館に宿泊。
9/5	小鹿野から、途中馬車も利用して三峯山へ向かう。おそらく賛川沿いに、地質および造植林帯を観察。夜は三峯神社宿坊に宿泊。星月夜だが遠くに稲妻も見えた。
9/6	三峯山を下り、影森の橋立鍾乳洞などを見学。夜は、秩父大宮(現在の秩父市)の「角屋」に宿泊。
9/7	秩父大宮から本野上を経て、列車で上野に向かう。上野駅23時00分発急行青森行き夜行列車で、帰途につく。
9/8	12時59分盛岡着、解散。

※ <http://www.ihatov.cc/> 浜垣誠司「宮沢賢治の詩の世界」より補足・転載



歌碑を前に二十歳の賢治に思いを馳せる

毛虫焼く
まひるの火立つ
これやこの
秩父寄居の
ましろきそらに
つくづくど
「粋なもやうの
博多帯」
荒川ぎしの
片岩のいろ

○大正5年、
上野へ熊谷へ寄居へ秩父へ

宮沢賢治【1896(明治29)年8月27日 - 1933(昭和8)年9月21日・享年37歳】は、岩手県花巻市生まれ。幼少のころから「石ッコ賢さん」と呼ばれるほど石好きで、頭もよく経済的にも裕福な家で育ちました。県立盛岡中学校を卒業した後、盛岡農林学校農学科二部に主

席で入学。1916(大正5)年、恒例となっていた秩父地方の地質に関する調査・見学旅行に、関豊太郎教授の指導で、学友22人とともに参加しました。その道中で、ここ寄居の地を訪れていたのです。

この全行程を、萩原昌好氏の著書『宮沢賢治「修羅」への旅』における考証をもとにして再構成してみると、表のようになります。



○石ッコ賢さん

井戸川眞則著「石ッコ賢さん」——宮沢賢治と寄居——という一冊の本をご紹介します。この本は、「寄居文芸」に掲載されたものをまとめたもので、文中には、藤田薫、川辺岩太郎、大沢勝、宇野政雄の各氏など、郷土の大先輩の名が連なっています。井戸川氏が、「寄居」を歩いた宮沢賢治のことを郷土の皆さんに知ってもらいたいという強い思いから、今から約13年前に調査・研究をして一冊の本にまとめたものです。その過程で、平成5年、町民有志により、旧寄居保健所(現在の障害者交流センター)前に、赤御影石に刻まれた賢治の歌碑が建立されたのでした。



資料提供：林風舎

特集

宮沢賢治と寄居

高倉健さんの遺作「あなたへ」という映画の中で、亡くなった妻(田中裕子さん)が「天空の音楽会」で歌う曲を聴いたことがありますが、「星めぐりの歌」という曲で、作詞・作曲は、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」の詩人であり、童話「銀河鉄道の夜」の作者でもある宮沢賢治。最近では朝の連続テレビ小説「あまちゃん」のBGMとしても使われました。

今から約100年前の1916(大正5)年9月3日、当時20歳の宮沢賢治が、この寄居を訪れていたことを皆さんはご存じでしょうか。

星めぐりの歌

あかいめだまの さそり
ひろげた鷲の つばさ
あをいめだまの 小さいぬ
ひかりのへびの とくろ
オリオンは高く うたひ
つゆとしもとを おとす
アンドロメダの くもは
さかなのくちの かたち
たくまのあしを きたに
五つのはした とくろ
小熊のひたいの うへは
そらのめぐりの めあて